
ペルソナのカガミ

片山澄夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナのカガミ

【Nコード】

N2247G

【作者名】

片山澄夫

【あらすじ】

夜の街で働く青年、カガミには、本人も知らない謎があった。その謎とは…。

<カガミ>

オレの名前はカガミ。

今はママさんの紹介で、六本木のとあるクラブで働いている。

クラブといっても、踊るほうではなくて、

女の子がついてお酒を飲むところだ。

その店でオレは、ボーイの見習いをしている。

ママさんは、このあたりでは結構、顔が利くので、

その点では安心して働いている。

以前は銀座にいたこともあったらしいが、

若々しく華やかな雰囲気か性に合うようで、

この街で店を出すことにしたようだ。

だから、お店の女の子も、若くて派手な感じの子が多い。

客層も、マスコミの関係者や若手の実業家がほとんどだ。

店の名前は「ペルソナ」。

仮面、というような意味だろうか。

オレがこの店に来たのは、

ママがオレの両親の営むバーの常連さんだったからだ。

オレもそのバーで両親の手伝いをしていた。

思い出すのも嫌な、あの事件が起こるまでは…

<事件>

あの寒い冬の夜、

年末も押し迫って人々が慌しく路地を行き交う頃、

店の裏で、オレは空ビンを片付けていた。

その日は、少し前にボーナスが出たせいか、

客のフトコロ具合もいつもより暖かく、

忘年会の二次会から流れてきたのか

皆、ホロ酔い気分で談笑していた。

夜が深まるにつれ、

一人、また一人と家路につき、

最後の客が店を後にして

少し経った頃だった。

「ガシャン！」

何かが突っ込んできたような音が、

店の裏まで響いてきた。

一瞬、何が起こったのか分からなかったが、

正気を取り戻すと、

急いでドアを開けて店の中を覗き込んだ。

すると、さっきまで賑わっていた店の中は、

無残な状態になっていた。

和やかな空気は消え去り、

明かりの消えた店内からは

金属とホコリ、それにオイルの臭いがした。

最初、事態が飲み込めなかったが、

よく見ると、

店の入り口から、トラックが突っ込んできたことがわかった。

暗がりの中、本来なら見えるはずのない街の明かりが

今まで壁があつた場所から差し込んでいた。

とつさに両親の事が気になり、

トラックの先頭部分に目をやると、

瓦礫の山に埋もれている、両親を見つけることができた。

「父さん！母さん！」

助けようとしたが、どうにもならない。

オレは途方に暮れた。

<両親の死>

呆然とその場に立ち尽くして、どれくらい経っただろうか。

気がつくと、誰が連絡してくれたのか、

救急隊が到着していた。

その時点で両親の心配停止が確認された。

トラックには運転手はおらず、

誰かが意図的にトラックを店に突っ込ませた可能性が高かった。

オレは現場に来た刑事から、いくつか質問を受け、

もうろうとした意識の中、何を答えたのか、

あいまいな記憶しか残っていなかった。

どこから聞きつけたのか、

ママが来てくれた。

「近所の常連さんが、あたしに連絡してくれたの。

大変なことになっちゃったわね…。」

身寄りを失って、行くあての無くなった俺は

ひとまずママの世話になることにした。

<ママ>

実をいうと、ママは以前から、オレの事を気に入っていたらしく、店に通っていたのもオレ目当てという部分があったようだ。

ママにとっても、

オレの両親との触れ合いは、東京で家族的な温かみを感じられる

数少ない貴重な場だったのだろう。

自慢になってしまいかもしれないが、

こう見えて俺は色白で背が高く、

顔はジャニーズ系やホスト系と言われることも多かった。

街で声をかけられることも度々あったが、

オレは派手な世界には興味は無かった。

むしろ、こうして都会の片隅で、気心の知れた人たちと暮らすほうが

好きだった。

<両親>

オレの両親は、実は、本当の親ではない。

両親、つまり、

オレの養父母がオレを連れて田舎から出てくるちょっと前に、

本当の両親は既に亡くなっていた。

しかし、養父母に、両親の死について尋ねても、

「時期が来たら話す」の一点張りで

詳しく教えてもらうことはできなかった。

養父母は、謎を抱えたまま、旅立ってしまった。

ママの店で働くことになったオレは、

もともと養父母の店を手伝っていたこともあって、

客商売には少しは慣れていたが、

女の子の対応には苦労していた。

そんなある日、

事件の時、現場に来ていた刑事がやってきた。

「先日 の事件 のことで…」

運転手が乗っていなかったことで、

単なる事故ではないと皆が疑っていた。

店の奥、ロッカーに囲まれた事務所で、刑事は質問した。

「何か心当たりはありますか？」

「いや、思い当たることは無いんですが…」

「どうも単なる地上げ目的ではない様だし、困りましたね…」

オレも困っていた。

犯人は一体、誰なのだろう？

養父母は誰かに恨まれるようなことをしたのだろうか？

< 遺品 >

壊れた店の後片付けをしていると、

養父母の遺品の中から、一通の手紙が出てきた。

それはまるで、養父母自身の死を予感させるような内容で、

オレの出生の秘密についても書かれていた。

手紙によると、

オレと養父母は北国のとある村の出身で、

十数年前の冬の夜、養父母とオレの3人は

何かの理由で村から逃げ出し、

命からがら東京まで辿り着いた、

ということだった。

驚くべきことに、

オレには双子の妹がおり、

その妹にはその村の出身である証の刺青が

内腿に描かれている、とのことだった。

俄かには信じ難かったが、

オレには納得できる理由があった。

実はオレの右足の内腿にも、刺青があったからだ。

両親の死と同様、刺青についても

生前、養父母に尋ねるのは、タブーだった。

妹の生死は不明だったが、

オレにはなぜか妹が生きているような気がした。

だから、オレは妹を探す決心をした。

<旅立ち>

北国へ向かう列車は、帰省の客で混み合っていた。

といっても、年末まではまだ少し間があったので、

座れない、という程では無かった。

オレは、どんよりと曇った空の下を走る鈍行列車の中で
考えていた。

「いつたい、何があったというのだろうか？」

半日程かけて、列車は、北国の駅に着いた。

ここから更に数時間、

雪の降る山間の谷間を、

単線のディーゼル車は遡って行く。

むせる様な排気ガスの臭いが、

寒さをさらに厳しいものに感じさせる。

夕方を過ぎて、辺りがすっかり暗くなった頃、

汽車は終着駅に到着した。

今夜はひとまず、駅近くの民宿に泊まることにした。

<宿>

駅前に一軒だけある古びた民宿で、

オレは一夜を過ごすことにした。

「今夜もしばれるねえ…」

年の頃、七十は過ぎているだろうか。

白髪の老婆が、出迎えてくれた。

「あいにく、今日はおたく一人だもんで、

風呂はわかしてないんだよ。

食事は後で部屋まで届けるから、

しばらく休んでいておくんせえ」

湿った畳の上で、白熱電球の灯りを点け、

オレはもの思いにふけた。

ここから小一時間、

さらに山間にオレの生まれた村がある。

十数年前、そこで何があったのか？

「失礼するよ…」

そう言って老婆は、

ふすまを開けた。

「ここに置いておくで…。

食べ終わったら廊下に出しておいておくれ。

今日は寒いから、一本サービスしといたよ」

そういつて老婆は、膳の上に、お銚子形のガラス瓶に入った、

日本酒を置いていった。

冷え切った料理は、食べても寒さでほとんど味がわからなかった。

冷たい日本酒を飲んでいるうち、

それでも、少しは体が温かく感じられたのが唯一の救いだった。

食事もそこにオレは床に就いたが、

布団は重く湿気をおびていて、

部屋の中にも吐く息は白く、

夜半過ぎまで寝ることはできなかった。

<村>

いつの間に寝たのだろうか。

窓から差す朝日でオレは目を覚ました。

階下へ行くと、

老婆が朝食の準備をしていた。

「もう少し待っててくださいねえ。」

すぐ持って行きますよって」

「あのう…。」

お弁当を用意してもらってもよろしいでしょうか？」

「ああ…。」

それなら、あとでおにぎり握っておくで。

持って行っておくんなせえ」

「すみません。」

よろしく願います。」

オレは部屋で朝食を食べた。

味噌汁とご飯、ちょっとした漬物と玉子だったが、

それでも、昨日から冷え切った身体には

暖かい食事はなによりのごちそうだった。

片付けに来た老婆に、

オレは尋ねてみた。

「お婆さん、ちょっと聞きたいんだけど」

「あいあい、何でも聞いておくんなましねえ」

「山奥の、村のことなんだけど…」

老婆の顔はみるみるこわばっていった。

<記憶>

「あの村のことは、

しゃべりたくねえ。

あんたも、あの村には行かん方がええ」

「一体何があったんですか？」

しつこく食い下がると、

老婆はようやく重い口を開いた。

「十数年前、

あの村は焼き討ちにあったのう。

家が全部焼かれてしまったんじゃ。

たった3人、若い夫婦と幼い子供が助かったきりでのう……」

「他には……？ 誰か生き残りはいなかったんですか？」

「その子供には双子の妹がおったそうじゃ。

結局、行方が分からなかったんじゃが……。

あの火事のことじゃからのう。

きっと助からなかったじゃろう……。

年の頃はそう……。

生きていたら、ちょうど、あんたと同じくらいに

なっていたかのう……。

あんた……！

もしかして……！？」

「いや、まさか、

違いますよ。

僕はただ、村がダムに沈むと聞いて、

その前に一度見ておこうと思っただけです。」

「そうかい…。」

そんならええがの…。

あの村は呪われておるで…。

近づかんのがなによりじゃ…。

ナンマンダブ、ナンマンダブ…。」

「あの村が呪われている、というのは、

他にも何か理由があるんですか？」

オレは思い切って聞いてみた。

「…んむむ。」

あまり言いたくない話だがの…。

もうあの村もダムに沈むよって、

話してもよいかの…。

おたくさん、

このことは、決して、

他の人に話すでないぞ…。」

そして、老婆は続きを話し始めた。

<歴史>

老婆によると、

ダムに沈むその村は、

古来から、なぜか女性しか生まれず、

さらに、山奥ということもあり、常に貧しさにさらされていたという。

そのため、

人買いに買われて都会に連れ去られる者も多く、

そうした場合には、内腿に出自を示す刺青を入れられるのが

ならわしになっていた。

婿をとった者は村に残ることができたが、

多くの者は、村から出たら最後、

二度と帰ることは無かった。

「これでようやく、あの村の呪われた歴史も、終わりになるよって…。」

工事はあらかた終了し、春になるとダムが稼動し始める予定になっていた。

「まあ、気をつけておきなされや。」

「はい、ありがとうございます」

そう言うと、オレは宿を後にした。

<バス>

駅前で寒風に吹かれながら、

オレは山奥へ向かうバスを待った。

すっかり身体が冷え切った頃、

旧式のバスがやってきた。

「プシュウー！」

開いたドアからバスに乗り込むと、

運転手は何も言わずにドアを閉め、

バスを走らせた。

夏は登山道の入り口として賑わうというこの路線も、

冬の間は一日一往復のみになり、

客はオレ一人だった。

切り立った雪の壁の間を進みながら、

バスは山奥へと向かって行った。

「すごい雪ですね…。」

オレは、運転手のすぐ後ろの席に座って話しかけた。

「ほだねえー。この辺りは世界的にも有名な豪雪地帯だもんで、毎年こげなもんだがねえー。」

ほいでも、温暖化の影響か、これでも最近は少なくなったもんだがね。」

運転手は、人と話するのが嫌いではないようだった。

「お客さん、この寒いのにあの村まで行くなんて、変わったお人だねえ。」

「いえ、来年はダムに沈むそうなんで、その前に一度、見ておこうと思ったんです」

「ほだねえ。あの村も、いよいよダムに沈むんだねえ…。」

本当にいろいろあったもんよ」

「いろいろって、何ですか？」

差し支え無かったら教えて下さい」

「おたくさん、何も知らんのかえ？」

「ええ、特には…。」

「ふうむ…。」

あまり気持ちのいい話ではないがのう。

十数年前、村で焼き討ちがあったのを知ってなさるか？」

「ええ、その話は知ってます。」

「まあ、その事件にまつわる話がいろいろあつてな…。」

運転手は何か言いたげだったが、話はそこで途切れてしまった。

「その事件の犯人は、誰だったんですか？」

「それが、今でも分からんのじゃ。」

何でも、村人の一人が、火をつけて回った、

ということになっているようじゃが…。

本当のことは分からん…。」

「その頃から、ダム計画は始まっていたんですか？」

「ああ、そうじゃな。」

ダム計画にまつわる移転のトラブルが原因じゃないか、

という話もあったが…。

そうそう、ダムを誘致している議員さんが、

実はこの村の出身だった、なんて噂もあったなあ」

「そうなんですか…。」

運転手からは、それ以上の話を聞くことはできなかった。

<湖>

昨夜、あまり寝られなかったためか、

オレはいつの間にか眠ってしまった。

寝ている間に、夢を見たようだった。

夢というより、

断片的な映像といったほうがいいだろう。

燃え上がる古民家、逃げ惑う人々…。

「お兄ちゃん…!!」

そんな声が聞こえた気がした。

「プシューー!!」

次の瞬間、扉が開き、

バスは村へと到着した。

オレはバスを降り、周囲を見渡した。

さっきまでの雪の壁とは違ってかわり、

急に開けた視界の中に、

氷に覆われた小さな湖が広がっていた。

<痕跡>

見渡してみると、川下の方角になるだろうか、

ほぼ完成したように見える巨大なダムがそびえ立っていた。

しかし、年末のためか、作業員の姿は一人も見えなかった。

湖の周りを歩いたが、

深い雪に埋もれて、何も見つける事が出来なかった。

ふと、尾根の方を見ると、村全体を見渡すことができそうな高台があった。

オレは急斜面をゆっくり登ると、何かが雪の中から顔を出しているのに気付いた。

「…神社。」

首まで雪に埋もれた鳥居には、かろうじて読めるその文字と共に、牡丹に止まる蝶の紋様が彫られていた。

オレは後ろを振り返り、今は見えない村の姿に思いをはせた。

<議員>

東京へ帰ると、

オレはママに北国で見えたことを話した。

「なるほど…。」

そんなこともあるのね…。」

「そういう訳で、

双子の妹がどこかにいることは間違いない、と確信したんです。

でも、どうやって探したらいいのか…。」

「そうねえ…。」

まずは、ダムを誘致した議員について調べてみるとか…?」

オレとママは、それからしばらくの間、

議員について調べてみた。

調査はなかなかはかどらなかったが、

調べていくうちに、議員には、オレと同年代の娘がいて、

今は、ある女子大に通っていることが分かった。

「もしかして、彼女が妹さんなのかしら…。」

「だといんだけど…。」

とりあえず、

顔を見ないことには何とも言えないし…。」

オレ、彼女に会ってきます」

「気をつけてね」

<再会>

オレは議員の娘に会うために

彼女の通う学校に行き、

校門の前の喫茶店で人の流れを追った。

しかし、いくら探しても、彼女らしい姿は見つからなかった。

疲れてついウトウトしてしまった時、

背格好がオレと同じ位で、

顔もどこかしらオレに似ている学生が

友達と談笑しているのが目に入った。

「間違いない」

オレは急いで後を追い、彼女に声をかけた。

「あなた、誰？」

深く被った帽子を上げると、

オレは彼女に話しかけた。

「話があるんだ。」

少し時間をもらえないか？」

< 説得 >

話し始めると、

最初、彼女はオレの話をにわかには

信じられない様子だった。

無理もないだろう。

いきなり見ず知らずの男が現れて、

自分には双子の兄がいる、というのだから…。

しかし、出生の秘密について話し始めると、

彼女はオレの話に興味を示したようだった。

そして、

話が内腿の刺青に及んだとき、

彼女の視線が泳いだ。

「君の内腿にも、刺青があるはずだ…。」

「そんなもの、あるわけないじゃない！」

いいかげんな話をしないでよ！

失礼ね…。

帰らせてもらうわ!!」

そういつと彼女は、店を出て行った。

最初の対面は失敗に終わったが、

オレはあきらめなかった。

数日後、オレは再び彼女に会いに行った。

「また来てるわよ、アイツ」

「警察呼んだ方がいいんじゃない？」

絶対ストーカーよ」

彼女の友達が、彼女に話しかけた。

しかし、オレは、構わずこう言った。

「今度、店に来てくれ。」

気が向いた時でいいから」

そして、名刺を渡した。

オレは、最後の賭けに出た。

<VIPルーム>

その日もオレは、店で働いていた。

週末にしては客の入りも少なく、

ママと顔を見合わせていたところだった。

そんな時、店のスタッフがオレの名を呼んだ。

「カガミさん、

会いたいつて人がいるんですが…」

「奥まで呼んでくれないか」

「誰なんです？」

新しいコレっすか？」

「そんなんじゃないよ！

いいから早く仕事に戻れ…！！」

同僚を追い払うとオレは、

ちょうど予約が無く空いていた店の奥のVIPルームを

使わせてもらうことにした。

「こないだの話…」

「ああ、言われなくても分かってるよ。

来てくれたんだね」

「でも、どうして…。

あなた、男でしょ？」

「ああ、外見はね」

そう言いつと、オレは服を脱ぎ始めた。

「ちょ、ちょっと待ってよ…！」

オレは構わず服を脱ぎ続けた。

「もしかして…」

「そう、その、もしかさ。」

服を脱いだオレの内腿には、

蝶の刺青があった。

「それじゃ、あなたは…。」

彼女は、戸惑っていた様子だったが、

しばらくして落ち着きを取り戻すと、

覚悟を決めた様子で、言った。

「分かったわ」

スカートをめくり上げると、

彼女の左の太ももの内側には、

牡丹の刺青があった。

二人は何も言わず、お互いの顔を見つめ合い、

互いの刺青に手を当てた。

「まさか…。こんなことがあるなんて…」

「最初はオレも、信じられなかったさ。

でも、村へ行ったとき、

養父母の話が本当だって分かった」

すると彼女は、自分の生い立ちについて話し始めた。

<生い立ち>

自分は、物心つく前に両親を亡くし、

養父である議員に育てられた。

養父は自分を大事にしてくれたが、

同時に、密かに憎んでいるように

感じられる時もあった。

憎しみは、まるで、議員自身に向けられている

ようにも感じられた。

幼いとき、彼女は議員に刺青のことを聞いたことがあったが、

議員はひどく腹を立て、

「二度とその話はするな」

と言ったので、

それ以来、彼女は刺青について話すことはなかった。

刺青のせいで、

彼女は学校の授業や行事を休むことが多く、

周囲からは病弱だと思われていた。

「いつか自由になりたい」

彼女はいつもそう思っていた。

「学校を卒業したら、」

彼女は言った。

「どこかへ行ってしまおうと思ってたわ」

<対決>

突然、VIPルームのドアが大きな音とともに開かれた。

「やっぱり、ここだったんだな。」

さあ、帰るぞ」

「いやよ！

私、帰らないわ」

「バカを言うな！

お前のためにどれだけしてやったと思ってるんだ。

何も不自由させたことはないだろう。

さあ、帰るぞ」

「私、この人とここに残るわ。」

「お前のせいだぞ！」

こんなことになったのは…」

オレをにらみながらそう言うと、

議員は胸元から揮発油の入ったビンを取り出した。

「娘だけは、見逃すつもりだったが…」

「どうにか間に合ったか…」。

バカなマネはやめろ！」

張り込んでいたのか、

刑事が駆けつけた。

「議員、お前を逮捕する！」

「ううぬ…。これで何もかも終わりだ…」。

「お義父さん！！」

一体、何があったというの…？」

「トラックが店に突っ込んだ事件の黒幕が、

議員だという証拠を掴んだ」

「一体、どうして…」

オレは思わず呟いた。

「…私は、あの村を憎んでいた」

議員は自分の生い立ちについて話し始めた。

「私の母親はあの村の出身で、東京で父親に見初められ、

引き取られたんじゃない」

「やはりあの村で聞いた噂は、本当だったんですね」

「義父は母を虐待し、それが原因で母は亡くなってしまった…」

私は義父を恨み、いつか義父を見返したいと思った」

議員は大きく息をついた。

「私は猛勉強し、一流の国立大学に入った。

そして、義父とは対立する政党から立候補し、

若くして議員になったのだ。」

「なぜ、お義父さんとは対立する政党から

立候補したんですか？」

刑事が聞いた。

「父親に復讐したかったからだ。

実際、私は義父が関係する疑獄事件を暴き、

義父を引退に追い込んだ。

それが原因で義父は、その後、ほどなくして

失意のうちにこの世を去った」

「あなたが恨んでいたのは、

お義父さんだけではなかったようですね」

刑事がさらに聞いた。

「…。

私は、自分の血を憎んでいた。

それで私は、ダム計画を誘致し、あの村を沈めることにした」

「なんてことを…。

そこまでして…。何になるというのですか…!」

オレは思わず叫んだ。

「分からない…。

しかし、私は自分自身と共に、

村の歴史そのものを消してしまいたかったのだ…。

私は、村人に扮した男に火をつけさせ、

全てを焼き尽くそうとした。

しかし…。」

「オレ達三人が、逃げ延びてしまった訳ですね」

「私は、その場に一人残された赤ん坊、

つまり、娘を引き取り、育てることにした。

双子の兄を探すために…。」

「…！」

その場にいた全員の動きが止まった。

「よくそんなことを…。

…でも、お義父さんはお義父さんだったわ」

彼女が言った。

「ああ、育てているうちに情が移ってしまったのだ」

議員は続けた。

「逃げた3人をようやく探し出し、

地上げに見せかけてトラックを突っ込ませた。

それで、全てが終わるはずだった」

「でも…。

そんなことをして、何になるんです？

何もかも、闇に葬ってしまっ…。」

「私には、全てが恨めしい…。

これで終わりにしたいのだ…！！」

そう叫ぶと、

議員はピンを床に投げつけ、

ライターで火をつけた。

部屋は炎に包まれた。

<脱出>

「早く、早く逃げてえ〜!!」

ママが店の外から叫んだ。

もうもつと立ち込める煙の中から、

オレ達はやっとのことで逃げ出した。

東の空が白み始めた頃、

火事はようやく小康状態になり、

消防隊が現場の確認を始めた。

「被害者は…。」

幸いなことに、客の帰った店内には

オレ達以外には、誰もいなかった。

「お義父さん…」

「あれだけの火の勢いじゃあ、

助からないだろうなあ…」

刑事は言った。

<別れ>

「これから、どうするの？」

ママが言った。

「まだ分からないけど、

二人でなんとかやって行こうと思ってます」

「こうして見ると、

まるで恋人同士みたいね」

ママが彼女に言った。

「だといいんだけど。

フフフ。」

「何かあったら、

いつでも連絡するんだぞ。」

「はい。

刑事さんにも、

お世話になりました。

それじゃ、そろそろ...。」

「元気でね。」

「ママさんも、お元気で。」

いろいろありがとうございました。」

こうしてオレ達は、

新たな旅に出ることになった。

それは、

人生で初めて訪れた

平和な日々だったかもしれない。

<湖>

数ヵ月後、

暖かい春の日差しの中で

新しい生活にも慣れ始めた頃…。

テレビをつけると、

山奥のあの村がダムの上に沈んだ、という映像が流れた。

「終わったのね…」

「ああ…。」

全てが、

水の底に沈んだってわけか…」

だが、

オレ達は生きている。

そして、

運命を背負ったまま、

ずっと生きていく決心をしたのだ。

（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2247g/>

ペルソナのカガミ

2010年11月23日17時30分発行